

中年の危機からの学びは、大人の責任を果たすため



兵庫大学エクステンション・カレッジ顧問
香川 正弘

人生 80 年時代も過ぎて、いまや 90 年の人生も珍しくなくなった。井原西鶴は、その辞世の句で、「人間五十年の究まり、それさえ我にはあまりたるに、ましてや」と付けて、「浮世の月 見過ごしにけり末二年」と歌った。人生 50 年という観念は、信長が幸若舞で「人間 50 年、下天の内をくらぶれば、夢幻の如くなり」というので広く知られているが、江戸時代でも農民一揆で処罰されるときに、「自分は今も 50 年も生きたので」と進んで処罰された庄屋さんの話も読んだから、50 才というのが人生の大きな区切りとして広く受け入れられてきたように思える。井原西鶴もそういう意識を持っていた。人生 50 年、「それさえ我にはあまりたるに」という表現は、この 50 年で人として体験することはすべて体験し、社会人としてなすべきことはしたということ語っている。

江戸時代でも 50 才を越えて生きていく人たちも多くある。そうした人々の中には、ますます社会的に重要な仕事をせざるを得なくなる人々があり、また、本当の自分の人生に生きようと趣味や特技に努力する人たちがいた。どちらの側の人でも、そこには生涯を通じて学ぶ修身という考えがあった。幕末の儒学者佐藤一斎はそのことを「三学成」（『言志晩録』60 条）で「少くして学べば、則ち壮にして為すことあり。壮にして学べば、則ち老いて衰えず。老いて学べば、則ち死して朽ちず。」と述べている。

「壮にして学べば、則ち老いて衰えず」というのは、30 代から 40 歳代前半の働き盛り、元気いっぱいのに、仕事、社会、家庭子育て、個人の教養のどの分野も精一杯に学んでいけば、その次に来る老年期では「精神的にも社会的にも決して衰えず」「社会で有用な存在になる」というのである。「老いて学べば、則ち死して朽ちず」というのは、人としての智慧がますます磨かれ、子や孫、また社会の人々に役立つ、たとえ身は亡くなくても人々の思いや考えの中に生きるということを指しているように思える。50 才以降の学びの内容は、この世に生きていて本当の自分にあった人生に変えていくためのものでその典型的な事例は伊能忠敬であろう。忠敬については井上やすしの『四千万歩の男 忠敬の生き方』（講談社文庫）に詳し

く描かれている。

江戸時代に広く見られた「人生 50 年」という言葉は、現代ではもうほとんど死語に近いが、現代的に言い直すと「中年の危機」となるのではなからうか。それは若いときに設定した生き方が人生の後半に入って通用しなくなっていくことから生じる惑いである。私の場合は、47 才で佐賀大学から上智大学の文学部に移ったことから最大の「中年の危機」に直面した。職場が変われば人的、文化的、社会的な環境ががらりと変わる。世間の人、文学部の教授といえ、文学、歴史、詩歌、芸能など人の文化的な営みや江戸文化について何でも知っていると思っているらしく、時々余り知らない歴史や地名、郷土のことが話題になったりすると、文学部の教授ともあろうものがそんなことも知らないなんて、と云われたことが何回かあった。若いときからイギリスの大学開放史研究一筋で来ていて、日本人の地域社会、民俗文化、生きがい観や死生観について人に語るほどの知識や事例を持ち合わせていなかったためである。そんなことが重って、生涯教育学の教授の務めが果たせるかどうかという瀬戸際まで追い込まれることになった。このことで、我が国では「年齢相応」の日本人としての歴史文化、人文地理、民俗等の知識というものがあるということを知らされた。そうした知識が欠けていけばいくら専門性が高くても、自立した社会人としては軽蔑されることがある。

この種の危機は中年になると多少なりともだれでも遭遇するものである。徹底的に外国研究にのめり込んできた人ほど、50 歳前後に急に日本回帰をする傾向がある。その時の転回は、郷里の歴史や文化も知らないというのでは、日本に生まれてきた甲斐がないとさえ思うところからはじまる。急激な日本回帰を経た人たちの学習を見ると、古事記・万葉集からはじまって日本の古典文学、詩歌、芸術芸能というように読書の幅を拡げ、自分のアイデンティティを確認しながら涵養し豊かにしていくのが、共通して見られる傾向のように思えた。私の場合もまったく同様な道をたどった。読書はものを考える糧を得る最良の方法で、西欧では「時間空間を越えた旅」であり、読み切るのは「城攻め」に例えられることが多い。小説家志望の人の読書との違いは、どんな本でも生涯学習の素材の観点から読み込むことをしたということである。

日本文化に対してのコンプレックスが薄らいだのは 8 年間の猛烈な読書の後であった。その後は読書で学んだことを現地で確かめるべく、全国各地を旅して歩いた。後から調べてみると若山牧水と同じような道をたどっていた。牧水の生涯の旅程は 10 万キロ、宮本常一は 15 万キロと記憶しているが、こちらは文明の利器の車を活用し

て20万キロほど列島の中を回国した。今度は、旅することで、生きた本を読んだのである。その結果、気づいたことは、我が国の地域文化は山と川とで区切られ、長い封建時代の影響で、それぞれ特徴のあるものを形成しており、人々の「心の拠り所」の多くは神社、古刹、城址に見られることに気づいたことである。これらの歴史、伝統、文化に基づいた郷土愛の強いところでは、偉人がでやすく、起業家や文学者が出た場合、地域にもたらす恩恵は想像以上に大きいということも実感した。

現在の我が国の大学開放政策は、団体との連携により地域興しや社会的な課題解決を図ることを志向しているように思える。行政の行う地域振興施策からみればそれは正しい。しかし、大学開放ではもっと大事な教育の提供がある。それは、上に述べた「中年の危機」に見られる「自分は何者ぞ」という自己への深い問かけに多面的に応えるプログラムを提供することができるのが大学開放の講座である。戦後、「忘れてたり忘れさせられたり」して、自分のアイデンティティを見失ったり、生きる基準となる倫理や規範を経済におきすぎたりした人、郷里を失って地に足が着いていない人など、中年以降に内面の深いところで寂しさと心の貧しさを感じている人が意外に多いのである。これには、＜地域市民＞という概念を導入し、市民にふさわしい＜共通教養＞を形成して連帯意識を育てていくことが有効であると思う。＜地域市民＞意識は、郷里の歴史や文化を子どもや孫に伝え、子々孫々が定住して豊かな生活できる地域を作る基である。つまり、地域振興のもとにはここにあるのである。そのためには、生き方と地域について学ぶ必要がある。学ばねば、考える糧が乏しく、次の世代に伝えて育てることもできない。大人は子どもの教育に塾だ、お稽古事だとずいぶん教育投資をしてきた。中年以降は、自分のために投資をして「老いて学べば、則ち死して朽ちず」という人生を目指して学習していかなくてはいけない。

香川 正弘（かがわ まさひろ）

1942年広島県生まれ。広島大学大学院教育学研究科教育行政学専攻博士課程単位取得中途退学、1987年「イギリス大学拡張成立史研究」で教育学博士（広島大学）。上智大学名誉教授、NPO法人全日本大学開放推進機構理事長。